



実感と維持が内的体験の大きな割合を占めていた。精神的には【精神的な安定を認識する】【精神的安定を得る】【回復モデルに学ぶ】【回復モデルとなる】と変化していた。家族の変化は、【家族間役割を持つ】【コミュニケーションの改善】【関係の変化】【お互いを尊重しあう】【互いを必要とする】【家族の必要性を認識する】と変化した。医療従事者への要望では【個を尊重したケア】がすべて回復段階でカテゴリー化されていた。

断酒前の家族の状況は【危機体験】【抑うつ状態にあった】【子どもへの影響を危惧していた】であり家族に与える深刻な影響が明確になった。治療につながった契機としては【専門医療機関への相談】【ネットワークの活用】【身体症状の悪化】【家族問題の顕在化】【喪失体験】【底つき】【社会的危機に直面】であり、断酒後の家族の変化は【家族システムの変化】【将来への希望が持てた】【子どもの回復】【本来の自分を取り戻し始める】、家族は【家族全体を統合したケア力を持つ】を最も望んでいた。

断酒期間によって内的体験は異なり、入院から回復に至るまでの間に、AL 依存者が認知する事柄は拡大し、否認は改善し、自己への態度も内省に向かい、家族の大切さを再認識していく過程が明らかとなった。こうした内的回復過程を治療プログラムに盛り込むことで、自らの回復過程の指標とすることができると考えられる。しかし、断酒の一年離脱率は 30%と高く、本結果は断酒に成功した体験者の記述に基づく、理想的な回復過程ともいえる。

家族への初期介入時は最も大切であり、家族の精神的問題(うつ病、不眠、不安障害)の発見に努める事がその後の回復に大きな影響を及ぼす。AL 依存の背景にある家族問題を理解して介入することが重要である。AL 依存者も家族も「個を尊重したケア」を望んでいた。支援では患者を全人的に捉えることが基本になると思える。

#### 【論文審査の結果の要旨】

断酒会は AA (Alcoholic Anonyms) と共に、我が国のアルコール依存者の回復を支える自助グループである。AL 依存者は身体・心理・社会的な問題を持つため個人への医学的アプローチだけでは対応は困難であり、回復のためには医師、看護師、精神保健福祉士などの専門職が連携しながら支援していく体制づくりが必須である。本研究は、AL 依存者の治療に看護師として長期にわたって貢献してきた研究者の断酒会での体験が契機となり計画された。AL 依存者は入院から断酒維持にいたる過程で、どのような心の変化が生ずるのか、その過程で断酒会はどのような意義を持つのかを明確にすることが目的である。AL 依存になる背景は多様であり、その原因や環境も異なる。断酒維持の礎となっている断酒会についての研究は数少ない。本研究は多数の AL 依存者を対象にして、内容分析を活用し、断酒維持にいたる内的回復過程と断酒会の意義を明確にする研究あり、これまで日本では試みられていない斬新な研究である。その意味で本研究が AL 依存症の治療への貢献は大きいと言える。

研究者は AL 依存者を 4 つの回復段階に区分し、抽出されたカテゴリーの変化から内的回復過程を明確にしている。回復段階の区分は、認知機能の回復に 1 年、心身の回復に 3 年

を要するという研究報告に基づき決定されている。AL 依存者の内的回復過程は、身体と精神の回復(身体機能と認知機能の改善)、自己認識の変化(自己否定感から自己肯定感、そして内省へ向かう)、家族関係の変化(否定的感情の支配する家族から役割認識やコミュニケーション改善した家族へ変化)、断酒会との関係の変化(出会いから回復モデルとして断酒会の中心的存在になるまで)が結果として示されていた。AL 依存者は回復する過程で自己や環境(断酒会、地域、家族など)についての認識の広がりや深化が内的に生ずることを明確にしている。

この研究のもう一つの骨子は家族の内的体験を明確にしたことである。AL 依存者の家族は、治療導入期には危機体験、抑うつや不安などの精神症状を抱えている。家族への初期からの介入が必須であることを改めて示している。家族変化が生ずることがAL 依存者の回復に影響することも結果は示していた。AL 依存症の家族背景には世代間伝達の問題や共依存の問題があることは知られており、こうした観点から家族全体を治療の中心におくことが重要である。しかし、本研究の結果が示していることは、導入期は、家族も傷つき心身を病んでいる個人として支援する姿勢が必要であることを提示している。AL 依存症からの回復自体が家族に変化を来す。アルコールという媒介物がなくなった家族システムに家族がどのように再適応していくかを理解しておく視点も必要である。

研究者自身も論文の中で指摘していることだが、本研究は同じ母集団を経時的に追う Prospective な研究でないために、研究結果には一定の限界がある。しかし、Prospective な研究には疾患特性の観点から方法論的限界があり、本研究はその意味においても、研究的価値を十分に有していると思われる。

研究者はアルコール依存者への看護を実践と研究の双方にわたって長期に取り組んできた。本研究は、そうした経験知の上に計画実施された研究であり、またその結果も今日にアルコール依存症治療において意義深いものとなっている。その意味において本研究は博士(保健福祉学)の学位に十分値するものと判断する。